ケルニ、オドロキテ見レバ、白御小袖籠ノカタツキテ、香色ニコガシテケリ、アサマシト思テ、カヒマキテヌレタル方ヲ、上ニシテモチテ參ヌ、未ダヌレタルハイカニト仰ラルレバ、タヽタテマツリ候ヘ、シタハコガレテ候トゾ申ケル、尾籠也ト仰ラレテ、御小袖ハ給ハリテケリ、

〔類聚名物考人事十二〕よひまどひ　宵迷

日の暮夜になれば、はやうねぶたがるを、今もさいふなり、

〔源氏物語二十槿〕ふることゞものそこはかとなきうちはじめ、きこえつくし給へど、御みゝもおどろかずねぶたきに、宮もあくびうちし給て、よひまどひをし侍れば、物もえ聞えやらずと、の給ふほどもなく、いびきとかきゝしらぬをとすれば、略○下

〔書言字考節用集八言辭〕睡井エル説文、寢也、坐　坐寢同

〔倭訓栞中編二十九爲〕ゐねぶり　坐睡の義なり

〔古今著聞集十八飲食〕醍醐大僧正實堅もちをやきてくひけるに、きはめたるねぶり人にて、もちを持ながらふら〳〵とねぶりけるに、まへに江次郎といふ格近者の有けるが、僧正のねぶりてうなづくを、われに此もちくえとけしき有ぞと心得て、はしりよりて手に持たるもちを取てくいてげり、僧正おどろきて後、こゝに持たりつるもちはと尋られければ、江次郎其もちははやくへと候つれば、たべ候ぬとこたへける、僧正比興の事なりとて、しよにんにかたりてわらひけるとぞ、

〔先哲叢談後編五〕元淡淵

淡淵若冠志學、好坐暗室、雖白晝閉戸、僅照容光、讀書、夜對燈檠、每至雞鳴、隱几坐睡、以爲平生、竟無就寢、家人皆異之、

〔倭訓栞中編二十六牟〕むまねふり　馬上にて睡るをいふ、詩にも馬上續殘夢など見えたり、

〔平治物語二〕義朝青墓落著事